

【5】 =====

$n$ 次元ブールベクトル  $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n) \in B^n$  および  $\mathbf{b} = (b_1, b_2, \dots, b_n) \in B^n$  に対する OR 演算  $+$  および AND 演算  $\cdot$  が, 成分毎の OR 演算および AND 演算であるから, これらの演算によって得られた結果  $\mathbf{a} + \mathbf{b} = (a_1 + b_1, a_2 + b_2, \dots, a_n + b_n)$  および  $\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = (a_1 \cdot b_1, a_2 \cdot b_2, \dots, a_n \cdot b_n)$  も, 明らかに  $n$ 次元ブールベクトルである. 従って, 与えられた OR 演算  $+$  および AND 演算  $\cdot$  は  $n$ 次元ブールベクトルの集合  $B^n$  上の 2項演算となっている.

そこで, 代数系  $\langle B^n, +, \cdot \rangle$  がブール代数の公理 (1)~(4) を満たすか否かを調べる.

(1) 単位元の存在:

全ての成分が  $0 \in B = \{0, 1\}$  であるような  $n$ 次元ブールベクトル  $\mathbf{0} = (0, 0, \dots, 0) \in B^n$  を考えると, これは任意の  $n$ 次元ブールベクトル  $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n) \in B^n$  に対して,  $\mathbf{a} + \mathbf{0} = (a_1 + 0, a_2 + 0, \dots, a_n + 0) = (a_1, a_2, \dots, a_n) = \mathbf{a}$  を満たす. 従って,  $+$  の単位元になっていることがわかる.

また, 全ての成分が  $1 \in B$  であるような  $n$ 次元ブールベクトル  $\mathbf{1} = (1, 1, \dots, 1) \in B^n$  を考えると, これは任意の  $n$ 次元ブールベクトル  $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n) \in B^n$  に対して,  $\mathbf{a} \cdot \mathbf{1} = (a_1 \cdot 1, a_2 \cdot 1, \dots, a_n \cdot 1) = (a_1, a_2, \dots, a_n) = \mathbf{a}$  を満たす. 従って,  $\cdot$  の単位元になっていることがわかる.

これらより, 2つの演算の単位元が  $B^n$  に存在することが分かる.

(2) 交換率:

任意の  $n$ 次元ブールベクトル  $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n) \in B^n$  および  $\mathbf{b} = (b_1, b_2, \dots, b_n) \in B^n$  に対して,

$$\mathbf{a} + \mathbf{b} = (a_1 + b_1, a_2 + b_2, \dots, a_n + b_n) = (b_1 + a_1, b_2 + a_2, \dots, b_n + a_n) = \mathbf{b} + \mathbf{a}$$

であり,

$$\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = (a_1 \cdot b_1, a_2 \cdot b_2, \dots, a_n \cdot b_n) = (b_1 \cdot a_1, b_2 \cdot a_2, \dots, b_n \cdot a_n) = \mathbf{b} \cdot \mathbf{a}$$

であるから, 交換率が成り立つことが分かる.

(3) 分配率:

任意の  $n$ 次元ブールベクトル  $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n) \in B^n$ ,  $\mathbf{b} = (b_1, b_2, \dots, b_n) \in B^n$ , および  $\mathbf{c} = (c_1, c_2, \dots, c_n) \in B^n$  に対して,

$$\mathbf{a} + (\mathbf{b} \cdot \mathbf{c}) = (a_1, a_2, \dots, a_n) + (b_1 \cdot c_1, b_2 \cdot c_2, \dots, b_n \cdot c_n) = (a_1 + (b_1 \cdot c_1), a_2 + (b_2 \cdot c_2), \dots, a_n + (b_n \cdot c_n))$$

を得るが, 各成分 ( $1 \leq i \leq n$ ) に対する式  $a_i + (b_i \cdot c_i)$  は分配律を満たすので, 次のように変形できる.

$$\begin{aligned} \mathbf{a} + (\mathbf{b} \cdot \mathbf{c}) &= (a_1 + (b_1 \cdot c_1), a_2 + (b_2 \cdot c_2), \dots, a_n + (b_n \cdot c_n)) = ((a_1 + b_1) \cdot (a_1 + c_1), (a_2 + b_2) \cdot (a_2 + c_2), \dots, (a_n + b_n) \cdot (a_n + c_n)) \\ &= (a_1 + b_1, a_2 + b_2, \dots, a_n + b_n) \cdot (a_1 + c_1, a_2 + c_2, \dots, a_n + c_n) = (\mathbf{a} + \mathbf{b}) \cdot (\mathbf{a} + \mathbf{c}) \end{aligned}$$

また,

$$\mathbf{a} \cdot (\mathbf{b} + \mathbf{c}) = (a_1, a_2, \dots, a_n) \cdot (b_1 + c_1, b_2 + c_2, \dots, b_n + c_n) = (a_1 \cdot (b_1 + c_1), a_2 \cdot (b_2 + c_2), \dots, a_n \cdot (b_n + c_n))$$

を得るが, 各成分 ( $1 \leq i \leq n$ ) に対する式  $a_i \cdot (b_i + c_i)$  は分配律を満たすので, 次のように変形できる.

$$\begin{aligned} \mathbf{a} \cdot (\mathbf{b} + \mathbf{c}) &= (a_1 \cdot (b_1 + c_1), a_2 \cdot (b_2 + c_2), \dots, a_n \cdot (b_n + c_n)) = ((a_1 \cdot b_1) + (a_1 \cdot c_1), (a_2 \cdot b_2) + (a_2 \cdot c_2), \dots, (a_n \cdot b_n) + (a_n \cdot c_n)) \\ &= (a_1 \cdot b_1, a_2 \cdot b_2, \dots, a_n \cdot b_n) + (a_1 \cdot c_1, a_2 \cdot c_2, \dots, a_n \cdot c_n) = (\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}) + (\mathbf{a} \cdot \mathbf{c}) \end{aligned}$$

従って、分配率が成り立つことが分かる。

(4) 補元の存在:

任意の  $n$  次元ブールベクトル  $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n) \in B^n$  に対して、 $n$  次元ブールベクトル  $\bar{\mathbf{a}} = (\bar{a}_1, \bar{a}_2, \dots, \bar{a}_n) \in B^n$  を考えると、

$$\mathbf{a} + \bar{\mathbf{a}} = (a_1 + \bar{a}_1, a_2 + \bar{a}_2, \dots, a_n + \bar{a}_n) = (1, 1, \dots, 1) = \mathbf{1}$$

および

$$\mathbf{a} \cdot \bar{\mathbf{a}} = (a_1 \cdot \bar{a}_1, a_2 \cdot \bar{a}_2, \dots, a_n \cdot \bar{a}_n) = (0, 0, \dots, 0) = \mathbf{0}$$

を満たす。従って、 $\mathbf{a}$  の補元であることが分かる。

**【6】** =====

ブール代数  $\langle B^n, +, \cdot, \bar{\phantom{x}}, \mathbf{0}, \mathbf{1} \rangle$  が  $\langle 2^S, \cup, \cap, \bar{\phantom{x}}, \emptyset, S \rangle$  と同型であることを示すため、次のような写像  $f: B^n \rightarrow 2^S$  を考える。すなわち、 $S$  の要素を  $S = \{ e_1, e_2, \dots, e_n \}$  とし、 $n$  次元ブールベクトル  $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n) \in B^n$  に対して、 $S$  の部分集合  $f(\mathbf{a}) \in 2^S$  を  $f(\mathbf{a}) = \{ e_i \in S \mid a_i = 1, 1 \leq i \leq n \}$  とする。

このとき、 $+$  の単位元  $\mathbf{0} = (0, 0, \dots, 0) \in B^n$  に対応する  $S$  の部分集合は  $f(\mathbf{0}) = \emptyset$  であり、空集合  $\emptyset$  はべき集合上のブール代数において  $\cup$  の単位元になっている。また、 $\cdot$  の単位元  $\mathbf{1} = (1, 1, \dots, 1) \in B^n$  に対応する  $S$  の部分集合は  $f(\mathbf{1}) = S$  であり、全体集合  $S$  はべき集合上のブール代数において  $\cap$  の単位元になっている。従って、単位元が単位元に対応付けられていることが分かる。

演算に関しても次の関係が成り立つ。すなわち、任意の  $n$  次元ブールベクトル  $\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_n) \in B^n$  および  $\mathbf{b} = (b_1, b_2, \dots, b_n) \in B^n$  に対して、 $f(\mathbf{a}) = \{ e_i \in S \mid a_i = 1, 1 \leq i \leq n \}$ 、 $f(\mathbf{b}) = \{ e_i \in S \mid b_i = 1, 1 \leq i \leq n \}$ 、 $f(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = \{ e_i \in S \mid a_i + b_i = 1, 1 \leq i \leq n \}$  であり、 $f(\mathbf{a}) \cup f(\mathbf{b}) = \{ e_i \in S \mid a_i = 1 \text{ あるいは } b_i = 1, 1 \leq i \leq n \}$  であるから、 $f(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = f(\mathbf{a}) \cup f(\mathbf{b})$  が成り立つ。また、 $f(\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}) = \{ e_i \in S \mid a_i \cdot b_i = 1, 1 \leq i \leq n \}$  であり、 $f(\mathbf{a}) \cap f(\mathbf{b}) = \{ e_i \in S \mid a_i = 1 \text{ かつ } b_i = 1, 1 \leq i \leq n \}$  であるから、 $f(\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}) = f(\mathbf{a}) \cap f(\mathbf{b})$  が成り立つ。さらに、 $f(\bar{\mathbf{a}}) = \{ e_i \in S \mid \bar{a}_i = 1, 1 \leq i \leq n \} = \{ e_i \in S \mid a_i = 0, 1 \leq i \leq n \} = S - f(\mathbf{a}) = \overline{f(\mathbf{a})}$  が成り立つ。

これらより、 $\langle B^n, +, \cdot, \bar{\phantom{x}}, \mathbf{0}, \mathbf{1} \rangle$  と  $\langle 2^S, \cup, \cap, \bar{\phantom{x}}, \emptyset, S \rangle$  が同型であることが分かる。